

ヨナ書——新約聖書と旧約聖書を結ぶもの

土 岐 健 治

はじめに

ヨナ書は旧約聖書の中で最も短く、その内容もおとぎ話風で、他の聖書諸文書と比べて軽視されている嫌いがあるように思われる。しかし、マタイ福音書一一39—41には「³⁹……悪しき不貞な (αυταρχικῶς) 世 (γενεά) は、徴を探し求めるが、預言者ヨナの徴以外には、それには、徴は与えられない。⁴⁰と云うのも、ヨナは海の怪魚 (κίττος) の腹の中に、三日三晩いたが、そのように、人の子は大地の内部 (καρδία) 心に三日三晩いるであろう。⁴¹ニネベの人々が、裁きの際に、この世 (ἡ γενεὰ ταύτη) と共に立ち上がって(復活して ἀναστήσει), それに対して有罪の判決を下すであろう。彼らは、ヨナの宣教 (κήρυγμα) に

直面して悔い改めた (μετανοήσας) からである。そして、見よ、ヨナよりも偉大なもの(中性)がここにいる」とある(ちなみに、ヨナ書ではヨナは一度も預言者と言われていない)。これに並行するルカ福音書一一29—30、32には「²⁹……(悪しきこの世は) 徴を探し求めるが、ヨナの徴以外には、それには、徴は与えられない。³⁰と云うのも、ヨナがニネベの人々に対して徴となったように、人の子もこの世に対して(同様に徴と)なるであろう。……³²ニネベの人々が、裁きの際に、この世と共に立ち上がって(復活して)、それに対して有罪の判決を下すであろう。彼らは、ヨナの宣教に直面して悔い改めたからである。そして、見よ、ヨナよりも偉大なものがここにいる」とある。このような両福音書の記述(一般にQ資料に属するとされている

る)に照らしてみると、ヨナ(書)は、新約聖書(イエス)を理解する上で、重要な位置を占めるのではないかと予感される。本稿では、ヨナ書の内容を詳しく検討し、そのメッセージを読み取り、それと新約聖書との関連を探ってみた。

一

まずはじめに、伝統的なヨナ書理解を見てみたい。木田は、ヨナ書は「ユダヤ人の選民意識の狭さをユーモラスに批判した興味深い作品である。紀元前五世紀後半エズラ、ネヘミヤによる改革が行われ、ユダヤ教団の戒律が確立され、選民意識が再び強化された。このことはペルシア時代の比較的寛容な支配の下にあって、ユダヤ人の間に律法主義のゆえに、異邦人に対する不要な硬直化を生む面があったのであろう。ヨエル書などにも依然として、……諸国民をエルサレムに集めて滅ぼし尽くすというような預言が繰り返されている。そういう狭さをヨナ書の著者は風刺した。紀元前四世紀前半の作と考えるのが妥当であろう」(四一九頁)。この文章では、硬直化した選民意識と律法主義が一体のものとしてとらえられている。しかしヨナ書には律

法(トラー)の問題は、全く出てこない。ヨエル書との関係については後述及び註7参照。Sekine+西村によれば、ヨナ書は「神の愛は選ばれた民に限られない、という教説を述べて」おり、本書には「神に選ばれた者にとって神の命令に従順であることがいかに難しいかというテーマ」が認められ、本書は「ユダヤ教の不寛容に対する戦闘文書である。神の愛を強調する寛大に、既に〈異教伝道〉の精神が感じ取られる」。鈴木は、ヨナ書には「異教徒が悔い改めて救われることに対するヨナの立腹という主題(選民思想への抵抗と神の憐れみ)」(二六六頁)があるとし、ヨナ書は「イスラエル以外の民に対する神ヤハウェの自由な救いの物語を語り、悔い改める者への憐れみを強調している」(三六七頁)と記す。西村によれば、神の「ダーバールに対する信頼が欠けるとき、予言の限界と知恵の限界が分離した形であらわになる。ヨナ書にはそれが鮮明な形で示される。……この物語は人々をして『死んだ方がましだ』と言わしめる様な時代に、イスラエルの存在の理由が疑われた時代に、人々に生きる勇気を与えた物語である。……ヨナ書は、生きる意味の問いが産んだ物語である。そしてその意味を神の摂理として受け取り、神の言

葉の歴史的創造的な力として受け入れていくことを問うた神の作品なのである」(一八七—一八八頁)⁽¹⁾。

筆者は、以上のような従来のヨナ書理解(解釈)は、ヨナ書の最も核心的かつ革新的な部分にふれていないように思われる。そこでまず、ヨナ書の本文に沿って、メッセージを読み取ることにはしたい。本文としては BHS (ヘブル語)と Ziegler (ギリシア語 || LXX) を用いる。

二

まず始めに、ヨナ書のヨナと、列王紀下一四三—二七(特に25)に登場する預言者ヨナとの関係に注目したい。両者共に「アミッタイの子」と呼ばれている。(もともと、列王紀下のヘブル語本文では、預言者という言葉がアミッタイにかかるとかヨナにかかるとか不明であるが、ヨナにかかるとするのが自然であろう⁽²⁾)。この両者について Soikine⁽³⁾と西村は「これは名前だけが共通していたにすぎないように思われる」とする。しかし、興味深いのはヨセフス『ユダヤ古代誌』九・二〇五—二一四の記事では、列王紀下一四三—二七とヨナ書とがまとめて要約敷衍されていることである。(ヨセフスの記述と旧約聖書の記述との比較は興味

深い問題であるが、立ち入る余裕がない)。ここでは、ヨセフスがヨナが逃亡をはかった目的地を、キリキアのタルソスと明記している点に注目したい。(ヨセフスは『ユダヤ古代誌』一・一二七で、ノアの子ヤベテの子の中の一人タルソスが、自分の支配する民をタルセイリスと名付けたとし、「昔キリキアはこのように呼ばれていた」と付記している⁽³⁾)。筆者は、ヨセフスをも参照して、ヨナ書のヨナは列王紀下のヨナの、一種のパロディーであると考え⁽⁴⁾。

列王紀下一四三—二七には、ヤラベアム二世という北王国イスラエルの王(在位前七八七—七四七)のことが描かれている。ヤラベアム二世は、神の前に徹底的に悪事を重ね、罪から全く離れなかった、と記されており、当然悔い改めることもなかったということになる。ところがその治世は四一年(イスラエルの王の中では最長)もの長きにわたり、その間にイスラエルの領土は非常に拡大する。ちなみに彼の治世に預言者アモスとホセアが登場して王の治世を批判している。「彼らは一方で強者による弱者の抑圧や不正の横行を告発し他方では形骸化した礼拝や異教的要素の蔓延を糾弾し、神の避け難い審判を告知した(アモ四—五章、八章、九—一四、ホセ四—五章、七—八章、一〇—一八

等)〔山我、一三二頁〕。このような悪しく罪深き王が、このように長い治世を恵まれて、イスラエルはかつてない繁栄を謳歌した。この繁栄は考古学的資料等からも裏付けられている(山我、一三〇頁)。この王の時代に、アミッタイの子ヨナ(ガテヘベル出身)が登場する。そして、このような悪王に対して、神が豊かな恵をお与えになる、ということ、ヨナは預言し、その通りになったと、列王紀下は記している。これに対して疑問を抱いた者たちがいた。一人は歴代志の著者(複数?)で、彼は資料として用いた列王紀からこの部分を削除した。もう一人は、ヨナ書の著者で、彼はヨナを主人公にした別の物語を作ることによって、列王紀(申命記的歴史)に対する、そしておそらくは歴代志に対しても、痛烈な批判を展開した。

さて、アミッタイ(*Amittai*)というのは「ヤハウェは真実(信実)である、忠実である、裏切らない」という意味である。新約聖書の言葉で言えば *verus Deus* あるいは *verus o Deus* に当たる。次いで、ヨナ(ヨナー^{Jonah})は「鳩」という意味で、読者は創世記八―12のノアの鳩を連想するかもしれない。その場合、その名は与えられた役割・使命を忠実に果たす者というイメージを伴うであろう。

もっとも、ホセア書七11の「エフライムは、鳩のように、愚かで、思慮がない。エジプトを呼び求め、アッシリアに行く」(鈴木訳)を暗示しているのかもしれない。⁽⁵⁾ いずれにせよ、ヨナ書では、ヨナに対して神は「立ち上がれ、そしてニネベ(アッシリアの首都)で呼ばわれ」と命ずる。

ヘブル語では、立ち上がるは *qam* (Qam, LXXでは *distom-* *ai*)。本稿冒頭のマタイ二41ルカ二32参照)、呼ばれるは *qara* (Qara, LXXでは *kyrouai*)。これらはヨナ書全体に現れる重要なキーワードである。ヨナは神の命令に反して、立ち上がらないで、下へ下へと降ってゆく。三節でヨナは確かに立ち上がるが、それはヤハウェの前から逃げ出すためである。(立ち)上がるの反対の降(下)るはヘブル語では *yarad* (Yarad, LXXでは *katagawa*)で、ヨナはまず *yoppa* (ニネベとは反対の西方)へ *yarad* し、次いでタルシシ(同じく西方)行きの船に *yarad* する(邦訳では船に「乗る」)。そして、嵐になると、さらに船の下の方、奥の方へと *yarad* する(五節)。こうして、ひたすら下り続けてついに魚の腹の中にまで下り、海の底にまで下っていく。*qara* については後述参照。もう一つのキーワードは、神に対する恐れ(*yare*)、

「*YHWH*」で、神に対する恐れはほとんど信仰と同義的であるといつてよい。ヨナ書一章を見ると、繰り返し神を恐れているのは、異邦人の船長や船乗りたちで、最初彼らの恐れの対象は、ヤハウェではなく、彼ら自身の神(単数)に呼び(叫び)求めて「*YHWH*」(「*YHWH*」マタイ福音書二七46参照)いる(五節)。一〇節では「非常に恐れ」とより強い言葉で表現され(漸層法)、一四節で彼らはヤハウェに向かつて叫び求め「*YHWH*」(「*YHWH*」)一六節に至って異邦人の水夫たちは「ヤハウェを非常に恐れた」とされ、異邦人は真実のヤハウェ崇拜へと進んで行く。そして、最後には、ヤハウェに犠牲を捧げて誓いを立て(二六節)、こうして彼らは立派なヤハウェ崇拜者となったとされる。ところが、この過程で、ヨナは「私はヘブル人で」(万物の創造者なる「ヤハウェを恐れる者だ」(九節)などと言いながら、その後の展開を見ると、彼は本当にヤハウェを恐れてはいないことが明らかである。

一12の「私には分かっていない(知っていない)」「(ヤーター、*YHWH*」*LXX*では*Yhwhka*)も重要なキーワードである。三―四章を見ると、実はヨナには何も「分かっていない」「知っていない」ことが明らかになる。さらに皮肉なこと

に、二9(口語訳聖書では二8)でヨナは「空しい偶像に心を寄せる者は、その真の忠節(愛、ヘセド、*YHWH*)を捨てる」(四2の「慈しみ深い」(ラヴ・ヘセド)参照)と、偶像崇拜者を非難し、私ヨナは彼らとは違い「あなた(ヤハウェ)に犠牲を捧げ、私の誓いを果たしましょう」(二10(口語訳聖書では二9))と未完了形(この場合は未来に当たる)で、神に語りかける。先に見たように、一章の終わり、水夫たちについては、完了形で、彼らがヤハウェを恐れて犠牲を捧げ、誓いを立てた、と記されているのに対して、ヨナについては未完了形で神への約束が記されているのみで、この約束・誓いが果たされたことが明記されていないどころか、三、四章の内容は、それとは全く逆の事態を示している。

三章に入ると、先にふれたカーラー(呼ばれる、のべ伝える)が、三章の最初の部分で繰り返し現れるが、ヨナを主語とした用例は四節の一回だけで、彼はやむお得ずしむしむ呼ばわり叫ぶ「*YHWH*」(「*YHWH*」)。ところが、三章の短い物語の中で、ヨナのカーラーを受けたニネベの人々は断食をカーラーし、王や大臣も布告を出して、繰り返し「呼ばわり」「ふれ」る(五、八節。七節の「布告を出す」

は $\text{P}27 = \text{LXX} : \text{krhousou}$)。そして王は王座から立ち上がる (クーム)。このように、神がヨナに命じたことを、ニネベの人々が次々と実行する。

そして三五に「ニネベの人々は神を信じた」とある。漠然とした恐れが、ここでも (水夫たちの場合と同様) 信仰へと進んだのである。「信じた」というのはヘブル語ではアーマーン ($\text{P}28$) で (アーメンの元になっている言葉) で、アミッタイと同じ語根に遡る語である (cf. Klein, s. v.)。前述のように、信仰告白の言葉を父親の名前として持つ、信仰深そうな人物が、実際にはアーマーンしていない。逆に、(水夫たちや) ニネベの人々がアーマーンしている。この言葉は、先に記したように、新約聖書の $\text{N}20\text{S}$ 、 $\text{N}20\text{S}'$ 、 $\text{N}20\text{S}''$ につながる。

三〇を見ると、ニネベの人々は「神が考え直し ($\text{P}29$)、 $\text{LXX} = \text{metanoëō}$)、思い直して下さる ($\text{P}29$)、 LXX 該当語なし) かどうか、その激しい怒りから向きを変え ($\text{P}29$)、 $\text{LXX} = \text{diprosōphō}$)、我々を滅ぼさないかもしれないということを、誰が知っているだろうか」と、非常に謙遜なへりくだった信仰告白をしている (一六の船長の言葉、一四の水夫たちの言葉を参照。なお三七の、人も家畜も牛も羊

も断食をする、というフレーズはヨエル書一20、二22を思い起こさせる。また、ヨエル書二14の、神が立ち返り思い直されることを、「誰が知っているだろうか」はこと全く同じヘブル語である)。このようなニネベの人々の態度を見て、神は災いを下すことを思い返す。列王紀下一四を思い起こすと、ヤラベアム二世は、ついに悔い改めて悪から離れることがなかった。ニネベの人々はヨナの言葉を聞いて悔い改め、神は災いを思い返す。旧約聖書の中で、神が災いを思い直す (ナーハム $\text{P}30$) という表現は、エレミヤ書一八8、ヨエル書二13、14、アモス書七3等々に見られるが、異邦人に対して災いを思い返すと言われるのは、ヨナ書だけである。 LXX の metanoëō も、神が異邦人に対して災いを「思い直す」という用例はヨナ書三9、10のみである。

四章に入ると、このように神が災いを思い返したのを見て、ヨナは激しく怒る。四2には「ああ、ヤハウェよ、私がまだ私の国にいた時に、私が言ったのはこのことではありませんか。……私は、あなたが情け深く憐れみに富む神で、怒るに遅く慈しみにあふれ、災いを思い直される ($\text{P}31$)、 $\text{LXX} = \text{metanoëō}$) 方であることを知っていたので

す(artificiality)」とある(鈴木訳を一部変更。「私は」から「思い直される」までの部分はヨエル書二13と酷似している⁽⁷⁾)。神はヨナが(偉そうに)「知っていた」(ヤード)と主張する通りになさったのに、どうしてヨナはどのように激しく怒るのか。ヨナはそもそも何を「知っていた」のか。神がイスラエル(ユダヤ民族)に対して恵深いのはよいけれども、異邦人、それもイスラエルにとって不倶戴天の敵、悪名高き、神の眼には「悪の枢軸」と写った(一2)アッシリアのニネベの民に対して神が恵深く振る舞うのを、ヨナはどうしても許すことができず、また理解することもできないのである。ここでは、あの列王紀下一章の預言者ヨナの姿がパロディー化されている、あるいは、それを批判している、と考えることは、両者は無関係であると考えるよりも、はるかに自然であろう。

ここまで来て、ようやく真相が明らかになる。「私は知っている(いた)」というヨナよりも、「誰が知っているだろうか」というニネベの人々(及び、船長や水夫たち)の方が、実は神の意志を、より正しくより深く知っており、神の意志に沿って行動している(一6、14参照)。「私は知っている(いた)」というヨナは、神はイスラエルに対

してのみ恵深くあるべきだという、非常に偏狭で、自分勝手な、自己中心的な、神の恵の理解、実は無理解、に留まっている。四章の「とうごま」のエピソードでは、神の自由な意志、人間の眼には不可解な神の救い滅ぼす大権が示唆されている(後述マタイ福音書二〇15、及び、旧約外典ユディト書八11―16参照。後者では、神の全き自由と、それに対する人間の全き信頼が説かれている)。「知っている」というのはどういうことなのか、ヨナの激しい怒りは正しいのか(四3「私には生きるよりも死ぬ方がましだ」(ニネベが滅びなかったから)、8、9「しかり、私は死ぬほど怒っている」(とうごまが滅びたから)、)ということが、四章の神とヨナとの対話の中で問われ、答えは提示されていない。ヨナ書は、ヨナに対する叱責を含む、神の疑問の言葉(四11)で終わる。「私は、この大きな町ニネベを惜しまないでおれようか?」。読者に自ら答えの探求を求め、この修辭疑問において、神は自らの憐れみの主権を強調し、この世と関わる神の行動の、人間の理性で理解可能な首尾一貫性を打ち崩す(Craig, p. 180)。ここには、ニネベには遅れをとったものの、ヨナに代表されるイスラエルの救いに対する希望が、暗示されて

いる。

ヨナ書は疑問文で終わっているが、同じアッシリアをテーマにして、旧約聖書の中で(新旧約聖書全体を通じても)もう一つだけ、疑問文で終わっている書物がある。それはナホム書である。ナホム書は、アッシリアがいかに悪いことばかりしてきたかを、縷々述べた後、最後に、アッシリアの滅亡を望み予言しつつ、アッシリアから苦しめられなかった民族があるだろうか、と疑問文で締めくくられている(三一九)。ナホム書はアッシリアが滅亡する(前六〇九年)少し前に書かれたと考えられているので、ヨナ書よりも何百年も前の書物である。ヨナ書はこれを意識しながら、同じ疑問文で全体を締めくくっている。そしてナホム書とは全く逆のことを、読者よ悟れという形で、我々に提示している。一言で言えば、ヨナ書の中心的主題は、逆転であり、イスラエル(選民)と異邦人(非選民)の逆転であり、異邦人の中にこそ真のヤハウェ信仰が認められ、彼らこそがイスラエルにとって手本となっているという意味での逆転であり、神の全き自由が引き起こす逆転である。(創世記二〇章参照)。

三

ヨナ書の成立年代については、正確なところは分らないが、「前五世紀の中葉から四世紀の始まりまでの間と想定すれば、大きく外れることはないであろう」(鈴木、三六七頁)。ヨナ書と新約聖書とどのように関わるのか。ヨナ書から新約聖書に至るまでの間には、初期ユダヤ教の世界における、数百年の思想的発展があることになるが、ここでは、許された紙幅の関係から、その点には立ち入らず、とりあえず、ヨナ書と新約聖書との間に認められる関連を考えてみたい。ヨナ書には、古代イスラエル思想、初期ユダヤ教思想、新約聖書思想、これら全体を貫く、非常に重要な、基本的な考え方が提示されていると思われる。

まず、ヨナ書のギリシア語訳(LXX)を見ると、そこには新約聖書において重要なキーワードとなる *κρίσις* (宣教する) と *κρίσις* (宣教、宣教の内容) という二つのギリシア語が現れる。既に「二」で見たように、この二つのギリシア語が「呼ばわれ」という意味のヘブル語カーラーの訳語として、ヨナ書のLXXの中で何箇所かに出てくる(一、二、三、四、五。三アのヘブル語は *קרא*。 *קרא* は

ヨナ書の専売ではない。LXXの全用例二一九の内五例がヨナ書に現れる(新約聖書の用例は六〇)。しかし、後で見ると、思想的にも新約聖書とこれだけ密接な関連を持った、しかも極めて短い書物の中で、繰り返し *κρυβωσα* が現れることは、注目される。*κρυβωσα* (三二) は LXX の中でさらに稀な言葉で、全四例中一例がヨナ書に現れる(新約聖書の用例は八)。

新約聖書の中には、ヨナ書のメッセージあるいは精神を受け継いでいると思われる言葉が、いくつか認められる。

マタイ福音書二二39—41とルカ福音書一一29—30、32については、本稿冒頭で言及した。付言すれば、マルコ福音書八11—12には「¹²……まことに私はあなた方に言う、この世には徴は決して与えられない」とあり、これがユダヤ人によるイエス拒絶の文脈の中に置かれている (cf. Edwards, p.106) ことが注目される。なお新約聖書の引用はネストレ27版による私訳である。

マタイ福音書二〇1—16。紙幅の都合で全体の引用は省くが、長時間ぶどう園で働いた人々はイスラエル(ユダヤ人)で、最後に来て一時間しか働かなかったのは、異邦人であり (cf. Beare, p.404) 八節によれば、賃金の支払い

は最後に来た者たちから始められる。そしてたとえば「¹⁵ 私が自分の物を自分が見たいようにするのは、当たり前ではないか。それとも、私が善い者 (*grados*) なので、あなたの眼が悪い (*roumbos*) のか。 ¹⁶このように、最後の者たちは最初になり、最初の者たちは最後になる」と締めくくられる。「眼が悪い」は「物惜しみする」「けち、貪欲である」「ねたむ」という意味であり、「善い者」は「気前のいい、寛大な」という意味であろう。なお一六節のみ、マルコ福音書一〇31とルカ福音書一三30に並行を見出す。

マタイ福音書一八12—14 || ルカ福音書一五4—7 (十10) …マタイ一八「¹²……もしもある人に百匹の羊があった、それらの中の一匹が迷い出たならば、九九匹を山に放棄して、その迷い出たものを探しに出てゆかないだろうか。¹³ としてももしもそれを発見したならば、……彼は迷い出なかった九九匹よりも、むしろその(羊の) ことを喜ぶであろう。¹⁴ このように、これらの小さな者たちの一人が減びることは、天にいるあなたの方の父の御前における意志ではない」。ルカ一五「⁴ あなたの方の中のある人が百匹の羊を持っていて、その中の一匹を失った(滅ぼした) ならば、九九匹を荒野に残して、その失われた(滅びた) もののた

めに、それを見出すまで歩き回らないだろうか。5そして発見したら、喜んで、(それを)自分の両肩にのせ、6そして家に帰ると、友人たちや隣人たちを呼び集めて「私と一緒に喜んで下さい、失った(滅んだ)私の羊をみつけたから」と言う。7……このように、悔い改めを必要としない九人のことよりも、一人の悔い改めた罪人のことで、天において喜びが生ずるであろう。……10……一人の悔い改めた罪人のことで、神の天使たちの前に、喜びが生ずる」。ルカでは社会の除け者に対する神の配慮が語られており、また失われたものの発見の喜びのテーマによって、一五8—10(見失った一枚の銀貨のたとえ)、11—32(放蕩息子のたとえ)と並べ結び付けられている。ルカに現れる「悔い改め」(μετανοια)はヨナ書に現れないが、動詞 μετανοεωは三9、10、四2に現れる(LXXの全用例は二四)。また「失う(滅ぶの)」(ἀπολαύω)はヨナ書一6、14、三9、四10に現れる。なおこの箇所はエゼキエル書一八21—24を思い起こさせる。同二三節「主なるヤハウェは言う、『私は、悪人の死ではなく、むしろ彼がその道から立ち返って生きることを、喜ぶのではないか』」。

マタイ福音書二二1—14 || ルカ福音書一四16—24。紙幅

の都合で引用は省略するが、大宴会に招かれていた者たちが次々と言い訳を言って出席を断ったので、宴会の主催者はおよそ宴会に出席するにふさわしくない者たちを無理矢理ひっぱってくる。マタイ二二7には、主催者(王)の僕たちを殺した被招待者たちに「軍隊を送って滅ぼし、彼らの町を焼き払った」とあり、二二14では「呼び招かれた者は多いが、選ばれる者は少ない」と、ルカ一四24では「呼び招かれたあれらの者たちの誰一人として私の宴会に参加しないであろう」と締めくくられる。逆転以外の何物でもないであろう。

マタイ福音書八10以下 || ルカ福音書七9—13 28—30 || マタイ八10—12 「10……まことに私はあなた方に言う、イサエルの中の誰にも、私はこれ程の信仰を見出さなかった。11そこで、私はあなた方に言うが、多くの人々が東から西からやって来て、アブラハム、イサク、ヤコブと共に、天の王国で宴席に着くであろう。12しかし、王国の子らは外の闇の中へと放り出され、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう」。これらを受ける形で、マタイ福音書は結尾部において、「18……私には、天において、また地上において、全き(すべての)権威が与えられた。19

そこであなた方は、行ってすべての異邦人(諸国民)(*ethnē ta ethnē*)を弟子とせよ……」(二八18-19)と、福音が異邦人へと向かうことを明言する。信仰概念は「異邦人に対するイスラエルの宗教的特権を無効にする」(小河・三四〇頁)。使徒行伝二八25-28(結尾部)もまた、福音がユダヤ人には理解されず、異邦人へと向かうことを明言する。

ロマ書二七-24、28-29「17もしもあなたが自らユダヤ人と称し、法(トーラー)を頼りにし、神を誇り、¹⁸(神の)意志を知り、法に教えられて重要(本質的)な事柄を正しく判断し、¹⁹²⁰あなたが法の中に知識と真理の具体的な形を持っている故に、あなた自身を眼の不自由な人たちの導き手、闇の中にある者たちの光、無思慮な者たちの教師、幼子たちの先生、と確信しているのなら、²¹他人を教えて自分自身を教えないのか。盗んではいけないとのべ伝えて(*epiboula*)、²²あなたは盗むのか。22姦淫してはいけないと語りながら、あなたは姦淫するのか。偶像を嫌悪しながら、あなたは神殿から掠奪するのか。²³法を誇りにしているあなたが、法に対する違反を行って、神を辱めているのか。²⁴(旧約聖書に)書かれている通り、『実際神

の名は、お前たちのゆえに、異邦人(諸民族)の間で冒瀆されている』⁽¹⁾、「²⁸と言うのも、眼に明らかにそうと分かるユダヤ人が(真の)ユダヤ人ではなく、眼に明らかにそうと分かる肉に刻まれた割礼が(真の)割礼ではなく、²⁹隠れた姿のユダヤ人が(真の)ユダヤ人であり、文字ではなく霊における心の割礼が(真の)割礼である。その人の受ける称賛は、人々からではなく、神から与えられるのである」。

ロマ書二九-30「²⁹それとも、神はユダヤ人だけのものだろうか。異邦人(諸民族)のものでもないか。しかし、異邦人(諸民族)のものでもある、³⁰本当に神は唯一なのだから。神は割礼(を受けた者)を信仰によって義とし、無割礼(の者)を信仰によって義となさるのである」。

ロマ書九30-32「³⁰……義を追い求めなかった異邦人(諸国民)が、義、信仰による義、を手に入れたが、³¹イスラエルは義の法(トーラー)を追い求めながら、法に達しなかった。³²なぜか。それは彼らが信仰に基づかないで(あたかも)行いに基づく(かの)ように(それを追い求めた)からである」。同一〇3「なぜなら、彼ら(ユダヤ人たち)は神の義を知らず、自分自身の「義を」立てよう

と熱望し、神の義に従わなかったからである」。同一—7「……イスラエルは、熱心に追いつめていたものを獲得しなかった。しかるに、選ばれた人々(非ユダヤ人で、キリストを信じた者たち)はそれを獲得した」。これらのパウロの章句には、明確に逆転の思想が認められる。ロマ書一—25—26「25……イスラエルの一部分がかたくなになつた(あるいは、された)のは、完全な数(πληρωμα)の異邦人が(神の国あるいは生命の)中へと入るまでである。26そして、このようにして、全イスラエルは救われるであろう……」。パウロは、選民イスラエルが先に救われ、その後で異邦人も救われる、という考え方を逆転して、異邦人が先、イスラエルが後と考えるに至つた。⁽¹⁵⁾パウロは回心してから一時アラビアに引きこもつたりして、やがて異邦人への使徒として活躍するに至るまでには十数年という長い期間があり、この間に彼は自分の民族的遺産、旧約聖書(ヘブル語本文やアラム語訳をも読んだかもしれないが、主としてLXX)、旧約外典偽典を含む、初期ユダヤ教諸文献に、丹念に目を通し、キリストに救われた者の眼を通し、新たに示された福音の光に照らされつつ、それらを再検討し、その結果、右に示したような逆転の思想に目覚めたの

であらう。

以上により、新約聖書がいかにヨナ書の逆転の思想を受け継いでいるか、あるいは新約聖書の中にヨナ書の逆転の思想が認められるかは、明瞭であらう。

四

新約聖書に記されたイエス自身の言葉の中に、ヨナあるいはヨナの徴という言葉が出てくることは、本稿冒頭で示した。興味深いのは、マタイ福音書は、冒頭に挙げたルカ福音書との並行箇所に加えて、一六4で「悪しき不貞な世は、徴を探し求めるが、ヨナの徴以外には、それには、徴は与えられない」と、再びヨナの徴に言及し、さらに一六17では、イエスに対して「あなたは、生ける神の子キリストです」と最初のキリスト告白をしたペテロに対して、イエスが「バルヨナ・シモン」と呼びかけていることである。ペテロの添い名(副名)としてのバルヨナは、この箇所の他には現れない。バルは「息子」という意味のアラム語なので、バルヨナは「ヨナの子(息子)」という意味になる。他の福音書伝承では、ペテロの父親の名前は、ヨハネとなつている(ヨハネ福音書一42、二二15以下)。マタイ福

音書の著者は、ヨナの徴、や「ヨナよりも偉大なものがここにいる」という言葉を、一二章、一六章で読者の心に印象づけた後で、ここに至って、キリスト告白をしたシモン・ペテロはまさにヨナの息子である、ヨナ書に示されている精神を受け継ぐ者である、ということを行っているとするのが自然で無理がないであろう。⁽¹⁶⁾ また、ヨナの徴という言葉については、イエスの十字架死と復活の徴、悔い改めの徴、等とされているが、このように見えてくると、実はむしろ、逆転の徴と言うべきであろう。

五

ヨナ書と新約聖書との関連は、以上に尽きるものではない。右記のように、ヨナの出身地は列王紀下一四章では「ガテへベル」とされている。ガテへベルは、ガリラヤ地方の村で、イエスの出身地ナザレの北東約五キロメートルに位置する。ガテへベルの出身者であるヨナが、ヨナ書ではヨッパに行き、そしてタルシシへと向かう。このタルシシは、一昔前まではスペインの港町の名前であるう、と言われていたが、⁽¹⁸⁾ 最近の言語学的な研究の成果として、「海」という意味ではないか、あるいは海を指すのではないか、

とされている。⁽¹⁹⁾ それはともかくとして、前記のように、一世紀のユダヤ人歴史家ヨセフスは、ヨナ書に出てくるタルシシは、キリキアのタルソス(口語訳聖書ではタルソ)のことである、と明言している(前述参照)。新約聖書に、そのキリキアのタルソス出身者が一人だけ現れる。言うまでもなく、パウロである。ところが、よく調べてみると、パウロがタルソスの出身であることは、使徒行伝の中に一度しか記されておらず、それもようやく二二・三に至って初めて示される。驚くべきことに、パウロはその書き残した多くの書簡の中で、ただの一度も、自分がキリキアのタルソスの出身であることに触れていない。それどころか、自分がディアスポラのユダヤ人であることすら、全く言及していない。そして、パウロを理解する上で、彼がディアスポラのユダヤ人であるとか、かなり深くギリシア・ローマの文化が流入していたと言われているキリキアのタルソスの市民である(あった?)ということは、大きな意味を持っていない。むしろ、パウロの教養は、パレスティナ(エルサレム?)において伝統的なパリサイ派的な教育を受けた一人の教養豊かなユダヤ人、熱心なユダヤ教徒としてのイメージを超えるものではない。当時、エルサレムに

おいても、ギリシア・ローマ文化全般に関するかなり高度の教育を受けることができたことは、ヨセフスの例からも明らかである。佐竹は、パウロが「特別深くヘレニズム文化の素養を身につけていた」とすることは、適切ではない（五七頁）と記し、アレクサンドレイアのフィロンの例を挙げて、パウロがフィロンほどに古典ギリシア文化やストア哲学に対する造詣が深くなかったことを指摘している⁽²⁰⁾。そこでこれまでの論議を踏まえて想像するに、ヨナ書において、ガテヘベルから、ヨッパへ、そしてそこから、一旦はタルソスへ向かい、しかし結局タルソスへは行かず、世界の中心的な都市であるニネベに達する、という構造が、かなり早い時期に、初期のキリスト教徒の間で、意識されるようになったのではないかと思われる。

福音書において、「ヨナよりも偉大なもの」と言われているイエスの出身地は、ガテヘベルの隣村ナザレであり、ナザレから福音が始まる。次いでヨッパに眼をとめると、ヨッパはペテロ（バルヨナー）との関連においてのみ現れる（使徒行伝九36—43、一〇5、8、22、32、一一5、13）。使徒行伝一〇—一二章を見ると、ペテロを中心として、異邦人受け入れの準備が整い（この部分は、異邦人に

対する態度・姿勢において、ガラテヤ書二11—14のパウロによるペテロ批判と相容れないように見受けられる）、二章では、ペテロはエルサレムでの投獄から（天使によって）奇跡的に救い出され、ヨハネの母マリアの家を訪れた後、「外へ出て他の場所へ行った」（一七節）と、行く先を明記されることなく謎に満ちた表現で、舞台から姿を消す（cf. Witherington, pp.388f.）。使徒行伝一五6でペテロが突然エルサレム会議に登場するのは、いかにも唐突の感を否めない。このような記述が意味するところは、使徒行伝において重要な役割を担う人物が、ペテロからパウロへと交代する、ということに他ならない。九1—30、一一30、一二25におけるパウロ（サウロ）への言及は、この交代劇への伏線であろう。そして二三章からはパウロが使徒行伝の記述の中心的な役割を担うことになる。つまり、福音はタルソスの人パウロに引き継がれ、パウロに担われて、ヨナと同様海上で暴風に見舞われて、世界の中心都市ローマへと至る。注目すべきことに、パウロがタルソスで福音の伝道宣教に従事したことは、使徒行伝にもパウロ書簡にも全く記されていない。使徒行伝によれば、パウロは回心後タルソスへ行っている（九30。一一25—26「バルナバは

サウロを探しにタルソスへ出かけて行き、そして(サウロを)見つけ、アンテイオケイアへ連れて行った」参照。 Cf. Witherington, p.326. いずれの箇所でもタルソスがパウロの故郷であることは全く触れられていない。ガラテヤ書一21の「それから私はシリアとキリキアの諸地域へ行った」参照。ここでもキリキアが彼の故郷であると記されていない)。しかし、そこで伝道活動をしたとは、一言も書かれておらず、三次にわたる地中海伝道の報告(記述)の中でも、キリキア地方を通過したことが一回だけ触れられているのみで(一五41)そしてパウロは、諸教会を強めつつ、シリアとキリキアを通り抜けた(あるいは、巡回した *διεπορεύθη*)、伝道の基地アンテイオケイアに近いのに、タルソスは全く無視されている。パウロの故郷がタルソスであるとする使徒行伝の著者の立場からすると、これは実に奇妙なことではないだろうか。使徒行伝の著者にとっては、ヨッパから世界の中心都市ローマへと福音が広がり到達する過程で、タルソス(の人)が何らかの重要な役割を果たすことが必要であったのではないか。もちろん、筆者はこの点について断定するつもりはないし、それは証明不可能であろう。しかし、それはいずれにせよ、新約聖

書(特に使徒行伝)における福音の広がり構造は、ヨナ書における神のケーリユグマの広がり構造と、パレラルであるという現象は、認めることができるのではないだろうか。

最後に、右に挙げた福音書の引用文の内、マタイ八10、二〇一―16とルカ一五10を除いて、すべての箇所がいわゆるQ資料に属する(ルカ一三30 || マタイ二〇16、ルカ一四16 || 24 || マタイ二二1―14、ルカ一五4―7 || マタイ一八12―14、はQ資料に属する可能性がある⁽²¹⁾)ことは、きわめて示唆的である。佐藤(2)によれば「イスラエルへの仮借ない断罪を中心的意図としたもうひとつの編集層(編集C)……が、この両者「洗礼者ヨハネを話題とする部分と弟子派遣説教の部分。土岐註」を包括する形で広がっているのが見られ」(二八三頁)、「全体的編集と思われる層(編集C)の関心もイスラエル断罪である」(二九二頁)。筆者は、Qとパウロとの間に何らかの親縁関係が存在したのではないかと想像する⁽²²⁾。

初期ユダヤ教全体の中におけるヨナ(書)の位置付け、あるいは右に記したような逆転の思想の系譜をたどることは、筆者の次の課題である⁽²³⁾。

付記：本稿は『一橋論叢』編集者からの要請に応じて十数日でまとめられたものであり、documentationや諸研究者との対話において欠けるところがあり、また定められた字数制限により議論や説明に万全を期すことができなかったことを、遺憾に思う。読者諸賢のご叱正を願うこと切なるものがある。なお本稿は拙論「イエスと初期ユダヤ教——黙示文学を中心として」(『イエス・キリストの再発見』百瀬文晃編、中央出版、一九九四年七月)一三—一四四頁、特に三二—一四四頁を増補改訂したものであることをお断りしておく。

- (1) 以上のほかのヨナ書解釈については、Emmerson及びMiles参照。
- (2) この点、池田訳「預言者アミタイの息子ヨナ」は不適切。
- (3) Cf. *Flavius Josephus: Translation and Commentary*, (ed. S. Mason), Vol.3, *Jewish Antiquities I-4*, by L.H. Feldman. (Leiden: Brill, 2000), p.46.
- (4) Milesもヨナ書のパロディ的性格を指摘するが、列王紀下一四章へのパロディとは解していない。
- (5) エレシヤ書四八28、ナホム書一7に基づいてヨナをイラエルの象徴とする説もあるが、筆者には説得的とは思えない。Cf. Emmerson.

(6) 「ヘブル人」というヨナの自称は明確に意図的である。「ヨナ書」の著者は、まさに、(ヘブル人という呼称が)アブラハムのような古風な人物像や出エジプト記の神を連想させる故に、ヨナにこの呼称を使わせ「たのであり(Harvey, p.109)」、「ヘブル人という呼称は慣例的に伝統主義や保守主義と結び付けられて」おり、「古風な雰囲気を持ち」それは「よいユダヤ人」という含みで用いられていた(Harvey, pp.146f.)。

(7) 前の段落でも指摘したような、これらのヨエル書との類似・酷似は単なる偶然ではない。ヨナ書はヨエル書をも批判している。

(8) 「……ヨナの心の中にイスラエル人以外の異邦人が救われることを拒否する思いがあった……神の救いの恵はイスラエルに限られるべきだという狭い選民意識、エリート意識がヨナにあった、あるいはヨナに限らず、当時のイスラエルの人々にあったことがそこに反映されています」(久野・一三二頁)。ここには、救われたのが、神が「悪の枢軸」とみなした異邦人である、という点への指摘が欠けている。

(9) 2で始まる文を「断じて……ない」と訳すことについては、岩隈直・土岐健治『新約聖書ギリシア語講文法』(二〇〇二年、キリスト教図書出版社)三二六頁、及びヨ

W. Danker (revised and edited). *A Greek-English Lexicon of the NT and other Early Christian Literature*. (The University of Chicago Pr.: Chicago and London, 3rd. ed. 2000), p.278 参照

- (10) 土岐・九一―九五頁⁶及び W.D. Davies and D.C. Allison, *The Gospel according to Saint Matthew*. (T.&T. Clark: Edinburgh, 1988), pp.639-640 参照。「眼が悪く」を New Revised Standard Version (NRSV) ⁷ envious と、 Revised English Bible (REB) ⁸ jealous と訳し、また「善く者」を NRSV も REB も共に generous と訳す。

- (11) これは LXX イザヤ書五二5の引用。LXX は BHS のヘブル語本文と相違している。

- (12) 「心の割礼」はすでに申命記一〇16、三〇6に明記され、旧約偽典「ヨベル書」一23でも、イスラエルの罪の糾弾と、そこからの立ち返りの希望という文脈の中で、明言されている。

- (13) ここではネストレ27版の *etna* ではなく、*eterna* という読みを採用した。

- (14) Dunn の註解書当該箇所参照。

- (15) サンダース・十一章参照。

- (16) 『旧約新約聖書大事典』(教文館、一九八九年)、項目

「バルヨナ」において、山我哲雄は、何の根拠も示すことなく「ヨナとは、この「ペテロの父」ヨハネの別名もしくは短縮形であろう」と記している。

- (17) 『旧約新約聖書大事典』、項目「ヨナのしるし」(山内真)参照。クラドックは「マタイにおいては、ヨナが三日三晩鯨の中で過ごしたことは、イエスの死と復活のしるしなのであった……しかし、ルカにおいては、ヨナの説教がしるしなのだ」(二六―二頁)と記す。確かに、マタイ二二40には「ヨナは海の怪魚の腹の中に、三日三晩いたが、そのように、人の子は大地の内部(心)に三日三晩いるであろう」とあるが、それに基づいて、マタイにおけるヨナの徴は「イエスの死と復活のしるし」であると言うことは、それではなぜ「ヨナ」が引き合いに出されるのか、という疑問に答えられない。ツェラーは、ヨナの徴が「審判を意味していることは明らかである」(二一六―七頁)と記し、推論と断った上で、「Qにとつての人の子としてのイエスの到来は、ニネベでのヨナの登場と同じくらい矛盾に満ちた仕方、つまり死からの奇跡的救出によって起こる。その際それがどのようにして正確に思い浮かべられたかについては未解決のままである」(二一八頁)と率直に述べている。Edwards, pp.106f. は、ルカにおいては、ヨナとの比較は、全面的に、地上における人の子の活動を強調してお

- り、マタイにおいては、ヨナの徴は、人の子の受難と降下の徴であり、マタイの編集の背景には、成熟した復活伝承が存在する」とするが、ヨナ書の研究がEdwardsには欠けている。その他の諸家の説については、Edwards: Bock, pp.1095-98; Reichelberg, pp.215-228参照。
- (18) 『旧約新約聖書大事典』項目「タルシシ」参照。
- (19) Cf. Stuart, pp. 450f. タルグム・ヨナタンではタルシシは「海」(כַּיָּם)と訳われている。A. Sperber, *The Bible in Aramaic: Vol.3 The Latter Prophets according to Targum Jonathan*. (Leiden: Brill, 1992), p.436. Cf. Sason, pp.78f.
- (20) 佐竹によれば、「彼がエルサレムで律法教育を受けたとする説は十分説得的ではないと思われる」(五九頁)。
- (21) 佐藤(1)三五頁及び佐藤(2)二九六―七頁の表による。もっとも筆者の尊敬するE・P・サンダース(デューク大学教授)はQ資料(文書)の存在を否定する(筆者との会話による)。
- (22) Tuckett, p.196によれば、LührmannはQ資料に現れる「この世」は全イスラエルを指す用語であり、Q集団の論敵はユタヤ民族全体であると解するが、Tuckett自身は、確かにQ集団の論敵は第一義的にはユタヤ人であるが、「この世」は、Q集団の宣教に応答しない現在のユタヤ人

で、過去にまで遡って全イスラエルを指すものではなく(pp.200f.)、Q集団は、隣人たるユタヤ人の社会的宗教的生き方から自分たち自身を分離させようとはしておらず、イスラエルに対する救いの希望をおきらめてはいなかった(pp.434f.)、と考える。このような考え方は、ヨナ書やパウロの考え方に共通する。

- (23) 筆者は、ユタヤ民族が他民族との関係をどのようにとらえていたかという問題を、monotheismとmonolatry及びuniversalismとparticularismの問題に関連させて、旧約聖書の後期の文書からフィロン、ヨセフスに至るユタヤ教文献の一部を資料として概観し、「一神教と人類意識——ユタヤ教の場合」(『中近東文化センター研究会報告』五号、一九八四年、一一―二頁)にまとめ、また、同様の問題意識から、旧約聖書外典偽典の内容を概観し、「旧約聖書外典偽典の語るもの」(『理想』六一九号、一九八四年二月、一四三―一五五頁)として公刊した。さしあたり、これらを参照いただければ幸甚である。神がユタヤ民族(エルサレム神殿)を捨てて、ローマ人の側に立っている、というヨセフスの歴史解釈を参照(『ユタヤ戦記』三・三五四、五・三六七、五・四〇八―四一二等)。LührburgのAppendixは旧約外典偽典、ユタヤ教、イスラム教、宗教改革者などにおけるヨナ(書)理解について簡に

して要を得た記述が見出される。

参考文献・略号表

日本語文献

池田・池田裕『旧約聖書Ⅵ、列王記』(岩波書店、一九九九年)

小河・小河陽『マタイ福音書神学の研究』(教文館、一九八四年)

木田・木田献一『総説旧約聖書』(石田友雄、西村俊明、木

田献一、野本真也、左近淑著、日本基督教団出版局、一九八四年)、四一九頁。

久能・久能牧『あなたの怒りは正しいか。ヨナ書講解説教』

(一麦出版社、二〇〇二年)

クラドック・F・B・クラドック『ルカによる福音書』(宮

本あかり訳、日本基督教団出版局、一九九七年)

佐竹・佐竹明『使徒パウロ』(日本放送出版協会、一九八一年。筆者は一九八三年の第五刷を使用)

佐藤(1)・佐藤研『イエスの語録資料(Q資料)と預言者の伝統——旧約から新約へ?』『教養学科紀要』(東京大学

教養学部教養学科、第一九号、一九八六年)

佐藤(2)・佐藤研『Q文書』(木幡藤子・青野太潮編『現代聖

書講座、第2巻、聖書学の方法と課題』、日本基督教団出版局、一九九六年、二七六—二九七頁)

サンダース・E・P・サンダース『パウロ』(土岐健治・太田修司訳、教文館、二〇〇二年。本書は一九九四年版の同タイトルの全面改訂版)

Sekine + 西村・M.Sekine + 西村俊昭『旧約新約聖書大事典』(教文館、一九八九年)、項目「ヨナ書」一二五〇—一二五一頁。

鈴木・鈴木佳秀『旧約聖書Ⅹ、十二小預言書』(岩波書店、一九九九年)

ツェラー・D・ツェラー、今井誠二訳『Q資料注解』(教文館、二〇〇〇年)

土岐・土岐健治『初期ユダヤ教と聖書』(日本基督教団出版局、一九九四年)

西村・西村俊昭『ヨナ書注解』(日本基督教団出版局、一九七五年)

山我・山我哲雄『聖書時代史。旧約篇』(岩波書店、二〇〇三年)

外国語文献

Beare: F. W. Beare, *The Gospel according to Matthew*. (Blackwell: Oxford, 1981)

- und > Gehorsam<*. (Vandenhoeck & Ruprecht: Göttingen, 1994)
- Miles: J. Miles, "Laughing at the Bible: Jonah as Parody", in Y.T. Radday & A. Brenner (eds.), *On Humour and the Comic in the Hebrew Bible*. (Almond Pr. Sheffield, 1990), pp.203-215.
- Moo, Douglas, *The Epistle to the Romans*. (Eerdmans: Grand Rapids, 1996)
- 木下隆之丞: E. & E. Nestle, K. Alnad et alii. (eds.), *Novum Testamentum Graece*. 27 Aufl. (Deutsche Bibelgesellschaft: Stuttgart, 1993)
- Person, Raymond F., Jr., *In Conversation with Jonah. Conversation Analysis, Literary Criticism, and the Book of Jonah*. (Sheffield Academic Pr: Sheffield, 1996)
- Reichelberg: Ruth Reichelberg, *L'aventure prophétique. Jonas, menteur de Vérité*. (Albin Michel: Paris, 1995)
- Sasson: Jack M. Sasson, *Jonah*. The Anchor Bible 24B (Doubleday: New York, 1990)
- Steffen, Uwe, *Die Jona-Geschichte*. (Neukirchner: Neukirchen-Vluyn, 1994)
- Stuart: Douglas Stuart, *Hosea-Jonah*. Word Biblical Commentary 31. (Word Books: Dallas, 1987)
- Tuckett: Christopher M. Tuckett, *Q and the History of Early Christianity*. (T & T Clark: Edinburgh, 1996)
- Witherington: Ben Witherington III, *The Acts of the Apostles. A Socio-Rhetorical Commentary*. (Eerdmans: Grand Rapids, 1998).
- Wolff: H.W., *Obadiah and Jonah*. Tr by M. Kohl. (Augsburg Publishing House: Minneapolis, 1986)
- Ziegler: J. Ziegler (ed.), *Septuaginta: Vetus Testamentum Graecum, XIII, Duodecim Prophetarum*. (Vandenhoeck & Ruprecht: Göttingen, 1967)